２０１３／５／２６　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：主がまず愛してくださった　②　兄弟を愛する
聖書箇所：ヨハネの手紙第一　４章１９節（３：１４－１６）

Ｉヨハネ３章をお開きください。きょうも私たちは互いに愛し合うということをテーマに、ご一緒に学んでいきます。

１．神からのメッセージ：「互いに愛し合うこと」　１１節

Ｉヨハネ４：１９「**私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。**」、すべてはそこから始まるわけです。私たちは、前回Ｉヨハネ３：１１から互いに愛し合うということについて学び、それは神様から我々信仰者に対して与えられた非常に大切なメッセージであるということを見てきました。

２．兄弟を愛さなかった人――「カイン」　１２－１３節

ヨハネはそのことを教えるために、兄弟を愛さなかった人、この主からの勧告に従わなかった人を具体的に挙げてその過ちを我々に教えてくれました。そういう歩みをしてはならないということです。このヨハネの手紙で、彼はお互い愛し合いなさい、兄弟を心から愛しなさいと、繰り返し私たちに教えます。カインのようであってはいけないと。

３．兄弟を愛する人――「真のクリスチャンたち」　１４－１５節

そして、きょう私たちが見て行くのは１４節からです。Ｉヨハネ３：１４－１５「**:14 私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。:15 兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。**」。互いに愛し合うということが神様からのメッセージであるということを教えたヨハネは、そのメッセージを守っていなかった、その教えに従っていなかったカインの話をした後、１４節から兄弟を愛する人々の話、つまり本当のクリスチャンたちの話をします。主の勧告に従わなかった人たちの話をした後、今度は主の勧告に従う人たちの話、互いに愛し合っている人たちの話、兄弟を愛している人たちの話へとヨハネは話を進めて行くわけです。

①　クリスチャンたち

対象がクリスチャンであることは明らかです。１４節は「**私たちは**」ということばで始まっています。日本語の聖書と同様ギリシャ語の聖書には最初に「**私たち**」ということばが出て来ます。なぜそういう書き方をするかというと、目的や理由があるのです。強調する場合にそのような書き方をします。ヨハネはここで、従わない人たちがたくさんいるけれども、「**私たちは**」と、自分たちのことを強調しています。そして、非常におもしろいのはこの主語の変化です。１３節では「**兄弟たち**」と言っていて、１４節では「**私たち**」と言っています。ヨハネはこの主の勧告に従う者たちの中に、兄弟を愛する者たちの中に自分自身を含んでいます。そこで彼は「**私たち**」と言うわけです。自分自身とこの手紙を読んでいる読者たち、既にキリストの恵みによって救われた者たちをすべて称してこのように言うわけです。ですから、兄弟を愛することを実践している私たち、つまり我々救いに与ったクリスチャンたちはというふうに、彼はこの１４節を始めるわけです。

②　クリスチャンの定義

では、クリスチャンとは一体どういう者たちなのか。ヨハネはその後、１４節の中でクリスチャンの定義を与えます。ごらんいただきたいのは、「**自分が死からいのちに移ったことを知っています。**」とあります。「自分たちは」と言わず、「**自分が**」なのです。救いというのは個人的なものだからです。非常に大切なのは、この「**死からいのちに移っ**」ている人、これがクリスチャンなのです。教会に属している人の話でもないのです。バプテスマを受けた人の話でもないのです。本当のクリスチャンというのは、「**死からいのちに移った**」人なのです。

●　「移った」

まずこの「**移った**」ということばは非常に大切なことばです。今お読みしたように、「**死からいのちに移っ**」ているとありますけれども、ここでヨハネが言いたかったのは、クリスチャンというのはこれまでいた死から出て来た人であり、そしていのちへと入った人たちであり、今までいた領域とは全く異なる領域に入った人たちのことだと、ヨハネは説明をするわけです。

(1)　救われる前のクリスチャン

皆さんもよくご存じのように、我々はみんな生まれながらに「**死のうちにとどまっている**」者でした。そのことは１４節の最後に出て来ます。ヨハネは、ある人々は今もなお死のうちにとどまっているし、

ある人々はその死のうちから出て来て、いのちのうちへと移った人たちで、この二種類の人たちがいるのだということを再びここで教えるのです。この世の中には、主によって救われたクリスチャンたちとそうでない人たちがいるということを彼は何度も私たちに教え続けるわけです。「**死のうちにとどまっている**」、これは例外なくあなたも私もその状態にいたわけです。感謝なことに神の恵みによってそこから出て来た。そして新しいいのちへと新しい領域へと神様が私たちを導いてくださった。だから我々はこうして神の恵みによって救われたことを喜んでいるわけです。

私たちはこのことをパウロのみことばから少し考えて行きたいと思います。エペソ２：１で、パウロは死のうちにとどまっていた私たちについて、「**あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、**」と説明を加えます。かつての私たちは死んでいたのだと言います。まず我々が見たいことは、ここにある「**罪過**」と「**罪**」という二つの名詞です。その中に我々は死んでいたとパウロは言うわけです。

・「罪過」

パウロがどういうことを我々に教えようとしているのか。この「**罪過**」というのは、「間違い」とか、「何かにつまずく」とか、「間違った方向に進んで行く」とか、また「倒れる」とか、「すべる」という意味を持ったことばですが、同時にこのことばは「堕落する」という意味にも訳されています。この「**罪過**」ということばは、我々の未来が決定づけられる、私たち自身の故意の行為を強調しているのです。つまりパウロはこの「**罪過**」ということばを使うことによって、我々人間の行なっている選択にはある結果が伴うということを言っています。そのことがその後に「**死**」ということばで出て来ます。ですから、パウロは「**罪過**」ということばを使うことによって、我々は神の前に間違った歩みをしているがゆえに、ある結果を自分の身に招くことになっている。その結果とは「**死**」だと言うわけです。なぜかというと、我々の歩みというのは神の前に間違ったものであり、そして我々は神の前に間違った方法で進んでいるわけで、神の前に堕落した存在である。ゆえに「**死**」という結果を招く存在であるということを教えようとして、この「**罪過**」ということばを使っています。どちらも「**罪**」を表すことばです。あえてそのように区別しているのは、パウロはあなたの誤った生き方には必ず結果が伴うと言っているのです。

・「罪」

「**罪**」ということばは、「的を外してしまう」とか、「目標からずれてしまう」とか、新約聖書においては「行動を起こすことの源」という意味を持っています。この二つのことばをパウロがここで使うことによって、我々自身は心において神様に逆らうものであること、そしてそれが実際に具体的な形、行ないとなって神様の前に逆らい続けていることを教えています。私たちの問題は心だけではなく、それが実際に行動となって出て来るわけです。もし私たちの行動だけでも完全であったら私たちは人を苦しめたり、悲しませたりするようなことはないわけです。しかし、悲しいことに心に問題があるだけではない、心が腐り切っているだけではない。その腐り切った心から腐り切った行ないが出て来ていることが私たちの問題です。ですから、パウロがこういうことばを使うことによって、あなたの心にある「**罪**」が行動へと至らせ、そういう行動があなたに「**死**」という大変な結果を招く状態にあるということをここでパウロは言ったわけです。

・「死」

もちろんご存じのように、この「**死**」は、肉体的に弱くなって滅んでしまって死んでしまうというわけではなくて、霊的に神様の前に死んだ状態であるということです。この２：１を見た時に、「**罪との中に死んでいた者で**」あると、過去の話です。肉体的には生きているのです。でも神の前には霊的に死んでいるのです。霊的に死んでいるから、神様のすばらしい祝福をいただくことがないのです。神様が約束してくださる永遠のいのちをいただくことはない。なぜなら霊的に死んでいるからです。肉体的に死んでいる人に幾らすばらしい洋服を着せようと、食べ物を置こうとそれを食べることができないように、霊的に死んでいる者は神様の祝福をいただくことはできないわけです。神の祝福も、神の喜びも、神の導きも、神の恵みをいただくこともできない。霊的に死んでいるのです。そしてそのように霊的に死んでいる人々には、神様からの呪いとさばきが約束されています。ですから、このエペソ２：１を見た時に、パウロは私たちにこれが私たちだったと教えてくれているのです。皆さんもご自分の信仰に至る前の姿を振り返っていただくと、そのことにお気づきになると思います。私たちは時にだれにも見られたくない、だれにも見ていてほしくない、心の状態を誰にも知ってもらいたくない。自分たちの心は汚れているからです。自分たちの思いが汚れているからです。そして我々はそのことをよく知っています。そしてそういう思いが我々の内側から形となって出て来ている。

人間が死に対して恐れを持っているのは、ひょっとしたらその先にとんでもないさばきがあるのではないかという恐れがあるからです。多くの人が言うように、死んだ後何もなかったら、何も恐れることはない。恐れを抱くのは、ひょっとしたら何かあるのではないかと思っているからです。動物はそんなことを考えていません、我々人間だけです。神に似たものとして造られた者たちは神がいらっしゃるこ

とを知っています。でもそれを認めたくないし、それを信じたくない。神は私たちに良心を下さって、過ちを犯せば、その良心でさえも我々に叫びます。そしてその誤った歩みの後にはさばきがあることを認めようとはしません。しかし、そのことを感じている。だから我々は死に対して恐れを抱くのです。

(2)　救われた

さて、きょうのテキストに戻ってください。ヨハネも私たちに同じことを教えています。かつての私たちは死のうちにとどまっていたと。霊的に死んだ状態であって、神様の呪いと怒りを受ける存在であった。しかし私たちはそのような死んだ状態であった者たちがそこからいのちへと移されたのだ。そのような状態から神様によって引き出されて、新しい領域へと、そのいのちの中へ我々は招き入れられたのです。「**死からいのちに移った**」の「**移った**」という動詞ですが、ヨハネはあえて完了形を使っています。なぜそんな時制を使ったのか、ちゃんと意味があります。彼が言いたかったのは、イエス様の救いをいただいたあなたは、もう既にそのようなことがあなたのうちに起こったからです。これから起こる話ではないのです。主によってあがなわれたすべての人々は、もう既に死からいのちへと移されたのです。でも彼があえて完了形を用いたのには理由があります。それは、あなたはそのような状態にもう既に招き入れられ、そしてそのような状態が今も継続しているということです。もっと言えば、そのような状態はこれから先も変わることはないのです。つまりあなたが神の恵みによって救われているなら、その救いは絶対に永遠に失われることはないのです。感謝なことでしょう？神があなたを一度救ってくださったら、その救いは永遠になくなることはない。あなたは死からいのちに移ったのです。そしてその状態が今も継続し、これからも継続すると言っているのです。救われたあなたは神によって永遠に救われているのです。

この「**移った**」ということに関して、同じヨハネがヨハネ５：２４で、「**まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。**」と、主のおことばを記してくれています。主イエス・キリストご自身が言われたのです。完了形です。もう既に移ったのです。そしてその状態がこれからも継続すると。ですから、神様の恵みによって救われた皆さん、リラックスすることです。感謝なことです。このような救いを神様は私たちに与えてくださったのです。

③　クリスチャンであることの確証：「救われていることがわかるか？」

ヨハネは私たちクリスチャンは、かつての霊的に死んでいた状態からもう既に救い出されて、新しいいのちの中に招き入れられた、移されたのだと話しました。あなたが本当にそのような救いに与っているかどうかということ、あなたが救われているかどうかがわかるのかどうか。そのことについて１４節でヨハネが教えてくれます。だって我々、疑問に思うことがあるでしょう？教会に通っているし、いろいろな奉仕をしているかもしれないけれども、自分は本当にこの救いに与っているのかどうかと。ヨハネに私たちが救われているかどうか、いのちに移ったかどうかというのはわかるのですかと質問したら、彼は「わかります」と答えます。それがこの後の１４節に書いてあります。「**それは、**」と記されているところからです。実はこの日本語の聖書で「**それは、**」と訳されている接続詞は「なぜなら」という意味を持っています。どちらかというとそちらの方がわかりやすいと思います。「**それは**」というのが間違っているわけではないし、もちろん「**それは**」でもわかるのですけれども、「なぜなら」の方がよりよくわかる。というのは、ここでヨハネはその理由を述べているからです。あなたが「**死からいのちに移ったこと**」がわかると言うのです。

ご説明する前に、１４節の初めに「**知っています**」と出て来ました。だからイエス様をお信じになったあなたは、あなた自身、救われたことを知っているというのです。そしてその上でこういう説明を加えました。なぜなら「**兄弟を愛しているからです。**」と。ヨハネはここで「**兄弟を愛している**」という行為によって救われたと言っているのではないのです。救われたということが兄弟を愛するという行為によって明らかになっていると言っているのです。誰ひとりとして、行ないによって救いに与る人はいません。兄弟を愛することにおいても、我々はみんな不完全です。同じように人を愛するということは非常に難しい話です。ですからもし主が愛されたように兄弟を完璧に愛しなさい、そうすればあなたは救いに至りますと言われたら、我々はみんな救われません。そんなことはできないからです。ヨハネが言いたいことは、あなたが死からいのちに移っている、そのことをあなたは知ることができるし、あなたは知っている。なぜならば、あなたには兄弟を愛するという新しい行動が生まれたからだと言うのです。それがヨハネがここで教えていることです。

ですから、この１４節を見ると、兄弟を愛している人々は自分が「**死からいのちに移ったこと**」を知っている者たちだと言うのです。その後、兄弟を「**愛さない者は**」、その人はまだ今も「**死のうちにとどまっている**」と言うのです。ヨハネは非常に驚くべきことを私たちに教えています。あなたの信仰が本当かどうかというのは、あなたが兄弟を愛しているかどうかでわかると言うのです。あなたが兄弟を愛してい

るならば、あなたはこの救いに与っているでしょうし、そうでなければ、あなたはこの救いに与っていないと言うのです。ですから、兄弟を愛するかどうかというのが、あなた自身が救いをいただいているかどうかのテストであるというのです。兄弟への愛によってあなたの信仰の真偽を明らかにすることができると言っているのです。この兄弟に対する愛が信仰の基準であって、本物かどうかを測る尺度なのです。だから我々自身にそう問いかけてみたらいいのです。好きな人を愛する、そうでない人を愛さない、残念ながらこれはイエス様を知らない人たちがやっていることです。そのことについてヨハネはこれから深い説明をしてくれています。少なくとも私たちが覚えておきたいことは、神の恵みによって救われたクリスチャンたちは、兄弟たちを愛する人たちです。そうでない人はその救いに与っていないとヨハネは教えています。

④　クリスチャンでないことの確証：「兄弟を憎む者」　１５節

この後１５節を見て行くと、クリスチャンでないことの証拠が記されています。まさに１４節と対比しながら１５節のみことばをヨハネは記してくれています。「**兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。**」と。非常に驚くべきメッセージです。兄弟を憎んだら、それは人を殺したことになるのだと。それを聞いて、あるイエス様のメッセージを思い出しません？ヨハネはこのアイデアを一体どこから得たのかです。あの山上の説教で主イエス・キリストがそのことをお話になっています。マタイ５：２１－２２「**昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。**」、これは出エジプト２０：１３の律法の話です。確かに律法にはそのように記されています。イエス様は教師と呼ばれている者たちに対してこう言われたのです。あなたたちはそういうことを教えているし、また多くの群衆たちにあなたたちはそのように教えて来たでしょう。そしてその上で、２２節「**しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。**」と。非常に驚くべきことをイエス様は言われたのです。

イエス様の話を聞いていた群衆たちは、モーセの律法に精通していました。その教えをずっと聞いて、それを守ろうとしていました。恐らくここにいたすべての人たちは、「私たちはこの律法を守っている」と思っていたはずです。だれも人を殺めたりしていない。人を殺してはいけない、殺す者はさばきを受けなければいけない。「感謝です、私は人を殺していません」、そのように思っていた。そしてそういう群衆たちに対してイエス様が言われたのは、あなたたちは実はこの戒めを犯しているのだと言うのです。あなたたちは人を殺していると。確かに我々は殺人を犯していない。しかし、神があなたや私を見た時に、あなたは殺人を犯していると言うのです。

その説明をこのマタイ５：２２でイエス様がなさったのです。少なくとも私たちは、この殺人という行為に関して聖書がどういうことを教えているか、少しは知っています。旧約聖書民数記３５：１１－１２に、「のがれの町」という話が出て来ます。人を殺した時に、ある人たちは「のがれの町」に逃げることができるのです。そしてそこにいるならば、恨みを抱いた人たちの復讐から免れることができた。申命記１９章や４章のところにもその話が出て来ます。ある殺人に関しては、まさに復讐をしたい者たちによって殺される人たちがいたわけです。殺されて当然なケースもあったのですが、ある殺人に関しては神様は「のがれの町」を作ってあげなさい、そしてそこに逃げ込んだ時に彼らに手を下してはいけないと言うのです。ということは、殺人を犯した者がいのちを絶たれることをよしとしているし、またもう一つの殺人を犯した者がいのちを絶たれることをだめだと教えているところがあるということです。その違いが何かなのです。一体誰が「のがれの町」に逃れることができるのかです。みことばはそれを教えてくれます。申命記１９：４に「**殺人者がそこにのがれて生きることができる場合は次のとおり。知らずに隣人を殺し、以前からその人を憎んでいなかった場合である。**」と書いてあります。また申命記４：４２では、「**以前から憎んでいなかった隣人を知らずに殺した殺人者が、そこへ、のがれることのできるためである。**」と。違いがわかりますでしょう？誰かのことを憎んでその人を殺した場合と、そうでなく何かのアクシデントによってその人がいのちを落としてしまった場合、後者の場合は「のがれの町」に逃げることができるのです。そしてそこで生きることができる、申命記４：４２では「**生きのびることができる**」と書いています。何が問題だったかというと、人を殺めた人の中に憎しみがあるかどうかなのです。悪意を持って殺した場合はその人のいのちは絶たれました。イエス様はあえてこういうお話をなさったのはどうしてかというと、その当時の人々の関心は何をするか、何をしないか、行動だけでした。イエス様がなさったことは人々の目をそれぞれの心に向けさせるものです。どういう心を持っているかだったのです。もし誰かに対して憎しみの心を持っているのであれば、まさにそれは殺人を犯したことと同じだと言うのです。

(1)　怒り

マタイの福音書を見ると、そこには怒りが出て来ます。そのことに関して２２節に「**兄弟に向かって腹**

を立てる者は」とあります。兄弟に対して怒りを持っている者はさばかれなければいけないというのです。

(2)　怒りがもたらす罪――ことばによる罪

「**兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は**」、おもしろいのは、こういう怒りを持っているならば、それは形となって出て来るという話です。ですから、ここに出て来る「**能なし**」とか「**ばか者**」というのは口から出て来ることばです。

●「能なし」

この「**能なし**」というのは、新解約聖書の注解のところに原語としてアラム語の「ラカ」と書いてあります。このことばの意味は「頭が空っぽの人」、「価値のない人」、「つまらない人」、「取るに足らない人」、「くだらない、愚かな人」です。つまり人に対して暴言を吐くような人の問題というのは、人のいろいろなあら探しをして、批判を与えるのです。批判を与えることによってその人の評判を落とそうとするのです。残念ながら私たち人間の心というのは、しっかり守っていないと大変です。誰かに対して怒りを持っていると、その人の幸せは絶対望まないでしょう？その人の不幸を望むでしょう？これが罪なのです。みこころに反することです。イエス様が言われたのは、私たち人間の心に問題があると言うのです。そして具体的に教えてくださったのです。人に対して、「彼らは本当にラカだ」、「愚かな人たちだ」、「彼らは価値のないつまらない人たちである」と悪い批判をする。

●　「ばか者」

そしてもう一つは「**ばか者**」と書いてあります。ののしったり、悪口を言う話です。なぜこんなことを主が言われたのか。どちらのことばも正しくない心から出て来ています。人を憎む心から出て来ることばです。

そしてそのような人を憎む心をずっと抱き続けているならば、それが殺人へと発展していく可能性がある。だって人を殺める人々の動機というのは人に対するいろいろな憎しみや恨みだったりするわけです。そういったことが行動へと至っている。まさに同じ心なのです。神がお造りになった最高のものに対してばか者だ、役に立たないやつだと軽蔑をする。そしてその人をののしり悪口を言う。それは実際に殺人を犯さなくても、心の状態は全く同じだと言っているのです。ある神学者はこの憎しみということに関して、「その人に根性や行なう機会があるかないかに関係なく、憎しみは誰かを抹殺するとか、消し去ることを望むことである。」と言っています。実際に人を殺めなくても、私たちが人に対してこんな人いなければいいのに、こんな人どこかに行ってしまえばいいのにと。みことばが私たちに言っていることは、そういった人に対する憎しみを持つことは殺人者が、実際に人を殺めた人たちが持っているのと同じ心であって、そして神はその心をごらんになっているがゆえに、それはまさに殺人者が持っていると同じ心であって、それは神の前に大きな罪であると言われたのです。神の目が見ておられるのは私たちの心の奥底です。どんな思いを持っているかです。

もう一度きょうのテキストに戻っていただくと、兄弟を「**愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。**」と。イエス様はマタイで非常に厳しいことを言われたし、そして恐らくそれを聞いていたヨハネは、ここでこのように伝えるわけです。もしあなたの心の中に、兄弟に対してそのような憎しみを持っているなら、あなたはまさに人殺しと同じですよ。そしてそのような思いを持っているあなたのうちには永遠のいのちがとどまっていないと。

一つだけ説明を加えさせてください。悲しいことに私たち神様の恵みによって救われた者たちの中にも、そういう怒りを覚えることがあります。でも神様によって救われている人たちは、すぐにその罪を神の前に告白して赦しを得る、そこが違うのです。ヨハネの手紙が私たちに繰り返し教えることは、罪を犯さないクリスチャンはどこにもいないのです。しかし、クリスチャンとそうでない人たちの違いは、罪を犯した時にそれを神に告白して神の前に赦しを求めるかどうかです。必要であれば人に対しても罪の告白をして赦しを求めるかどうかです。そういうことをするかどうかです。救われていない人たちはそういうことをしようともしません。神の前に喜ばれることをしようともしない。ですから、ヨハネはこのように語ったのです。「**だれでも人を殺す者のうちに**」、こういう憎しみを持っている者たちのうちに、「**永遠のいのちがとどまっていることはない**」と。彼らは決してその罪を神の前に悔い改めようとしないのです。

⑤　兄弟を愛する人の模範　１６節

その説明をした後、１６節に兄弟を愛する人の模範をヨハネは教えます。前回我々は１２節のところで、カインという兄弟を愛さない人物の模範を見たのです。今度ヨハネはここで兄弟を愛する人の模範を示してくれています。１６節「**キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。**」、ヨハネはここで兄弟を愛する人の模範として主イエス・キリストを挙げています。そしてそのことを通して、どのような愛を主が望んでおられるのかを読者たちに明らかにしようとするのです。１６節を見ていただくと、「**それに**

よって」とあります。１６節の初めには「**キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てに**」なったと。あのあがないのみわざによって「**私たちに愛がわかった**」と言うのです。この「**わかった**」ということばは、非常に熱心な熟考を意味します。熱心に考えに考えた上で得た知識を表す言葉なのです。ですから、考えた上で獲得したとか、考えた上で自分が身につけた知識の話です。しかも、この「**わかった**」という動詞の時制も完了形を使っています。というのは、もうそのことはあなたは過去において――その人が主イエス・キリストを信じた時の話です――「**わかった**」し、その結果が現在も継続している。別の言い方をすれば、主イエス・キリストを信じた時に私たちは愛というものが何かが「**わかった**」。そして「**わかった**」だけではない、その「**わかった**」愛が今の自分の生活の中に形をもって現れているという話をするのです。愛というのはそういう働きをするのです。これから私たちは見て行きますけれども、皆さんもよくわかっておられるように、聖書の言っている愛というのは、愛していますということばを口から出すだけの話ではないということです。なぜならこの１６節のみことばを見た時に、神は愛ですとは言わなかったのです。「**キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって**」、その行為によって、その行ないによって、「**私たちに愛がわかった**」と言うのです。ということは、イエス様の十字架を、あのあがないを見るまで我々は愛が何かわかっていなかったと言うのです。愛がわかっていない人が今の世の中に満ち溢れていると言うのです。しかし、私たちはイエス様を見上げて、あの十字架のあがないが私のためであったということに気づいた時に、こんなにも罪深い私を、こんなにも愛してくださっている方がおられると言って私たちはそのことに気づいたのです。そしてそのイエス・キリストを信じた時から、その愛が私たちの生活の中において影響を及ぼし続けているのです。それがここでヨハネが言っていることなのです。

主イエス・キリストの愛を信じた時と今も変わらず、その愛が自分の生活の中で働き続けていると言うのです。もう一歩進めば、ヨハネが言わんとしていることは、主イエス・キリストのあがないを見た時に、あの十字架を見た時に、本当にその主のすばらしい愛を知ったと。十字架で罪人の身代わりとなって、自分の身代わりとなって死んでくださったイエス様のとうとい犠牲、その愛。そして、その時以来ヨハネの心の中には、この神様に対する感謝が継続しているのです。そこは我々クリスチャンは少し考えてみなければいけないところでしょう？かつては感謝していました。しかし今、その当時と比べて、愛が成長しているかと言われたらどうでしょうか。ヨハネが言っていることは、初めてキリストの愛を知った時に本当の愛が何かがわかった。そしてその愛が自分の中に継続して影響を及ぼし続けている。そうして信仰者は変えられ続けて行くのです。でもそのためには、我々は主イエス・キリストの大きな犠牲を伴う、私たちが見たことも、経験したこともない、あの神の愛を覚え続けて行くことです。でなければ、私たちはその愛でもって人を愛することができないのです。

一言だけ言って、きょうは終わらなければいけません。ヨハネはそういうふうに生きていました。ヨハネの証を聞くならば、彼がこのイエス・キリストのすばらしい愛を知り、それを信じた時から、その愛は確実に彼のうちで成長し、確実に彼のうちで大きな変化をもたらし、神様は彼をキリストの愛を人々に知らしめる愛の人へと変え続けておられることをヨハネは言わんとしているのです。そして、そういうことを神はあなたや私のうちにもなしてくださっているのです。でも、それを邪魔するものがあるのです。罪です。私たちの心の中に少しでも罪が、人に対する憎しみがわき上がっていることを許すならば、我々はすぐにその愛を失ってしまうのです。皆さんの心の中で、あの人が大嫌い、この人だけはどうしても愛することができない。その罪が原因であなたは、この神の愛を人々に証する人になれないのです。みことばが私たちに教えてくれていることは、神様の愛を知ることによって、我々は人を愛する者になるのです。「**私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。**」、神の愛を知った者たちは、その愛によって愛し合う者へと変えられたのです。それを邪魔するのが罪なのです。感謝なことに私たちの罪を神様は赦してくださる。もし心の中にどうしてもあの人がと言うのだったら、その罪を主の前に告白することです。主の前に助けを求めることです。主が愛されたように、その人を愛するように。その人をどうぞ変えてくださいという祈りから、主よ、どうぞその人を愛せない自分を変えて行ってください。なぜなら神様が私たちに命じておられることは互いに愛し合うべきだと。兄弟を愛しなさいと。それがあなたに対する神様の勧告なのです。周りの人が愛されるに値する人になったからではないのです。神がこう命じておられるから、望んでおられるから私はそのようにして行きたい。その歩みを始めることです。そんなあなたを神様は祝してくださるのです。